

心の栄養剤 No.228 『「お帰り」と言ってくれる所』

今日のテーマは「ふるさと」です。

僕は作家なのでいつも言葉で考え、表現しようとしています。せっかくだから「ふるさとして何だろう」ということを、より魅力的な言葉で皆さんにお伝えしたいと思います。

親父は転勤族だったので、僕は高校卒業して上京するまでずっと転校、転校、転校でした。

だからいろんな町に住みましたが、どの町も「ふるさと」という感覚がないんです。

そんな僕にとって「ふるさと」は町とか場所ではないんですね。

僕が「ただいま」と言えるところ、僕に「お帰り」と言ってくれるところは一体どこなんだろう？と、いつも思っていて、それを小説の中で、「家族」「学校」「友だち」「夫婦」などを登場させながら問い掛けているような気がしています。

つまり、「自分が最後に帰るところ、そして自分のことを一番受け入れてくれるところ、それは家族だろうか、友だちだろうか」と。

例えば、一緒にいると心が安らぐ友だちっていると思います。逆に一緒にいると息が詰まる人もいますよね。

それと同じで、生まれ故郷でも、もしかしたら親戚との関係が面倒くさいとか人間関係で息が詰まるということがありませんか？それより都会のほうが周りは誰も知らなくて気が楽かもしれません。

そんなことを僕は、「ふるさと」がテーマではない小説を書く時でも、考えているんです。

僕の小説『幼な子われらに生まれ』が数年前、映画になりました。

主な出演者は浅野忠信さん、田中麗奈、寺島しのぶさん、宮藤官九郎さんです。

再婚した夫婦の奥さんのほうに女の子の連れ子がいて、再婚後、2人の間に女の子が生まれます。連れ子の娘にとってはお父さんの違う妹です。

そんな継ぎはぎの家族を描いたのですが、そのラストシーン辺りに僕はこういうフレーズを書きました。

「幸せとは、一番近くにいる人を一番好きでいられることで、遠く離れてしまった人に『お帰り』と言えることで、助けを求められたらいつでもどこへでも駆けつけられること」と。

最初の「一番近くにいる人」というのは主人公の男性にとって奥さんの連れ子である、血が繋がっていない娘さんです。

そして、「遠く離れてしまった人」とは男性にとって別れた奥さんに引き取られた自分の娘です。

だから実の娘は遠くにいて、義理の娘は近くにいる。

どちらに対しても「お帰り」と言えること。助けを求められたら、遠く離れてしまった娘でも、近くにいる娘でも、「どこへでも駆けつけるぜ」というのがお父さんにとっての幸せなんです。

僕は日本語の中で「お帰り」という言葉が一番好きです。

一人暮らしでも家に帰ると「ただいま」と言えますが、「お帰り」というという言葉は言えませんよね。

「お帰り」は帰ってくる人待っている人が言う言葉です。

そういう意味では、うちのお袋は一人暮らしをしているのですが、たまに僕が帰ってきた時に言う「お帰り」には、万感の思いがこもっていると思えるんです。

僕が書く小説に、やたらお盆の場面が出てきます。お盆というのは、亡くなった人の魂が帰ってくるんですよね。逝っちゃったんだけど、逝きっぱなしじゃなくて、お盆の間だけ帰ってくる。この風習が本当に好きなんです。

その時に感じる幸せな気持ちを、今から別の言葉に置き換えてみます。

「ふるさととは一番近くにいる人を一番好きでいられる場所で、遠く離れてしまった人に『お帰り』と言える場所」だと思っています。

No.225 『勝負師の負け方』

ある時、最長年将棋史名人の米長邦雄さんとお話をする機会がありました。

米長さんからは、「勝つことだけを幸せと思うと、勝負師の人生は圧倒的に不幸になる」と言われたそうです。

「では、勝つこと以外でいつ幸せを感じるのですか？」と吉永さんが聞くと、米長さんはこう答えました。

「負けた盤が微笑む時です」

将棋の手順を盤面上で振り返ることで、「ここを直せばあなたはもっと強くなれるよ」ということを負けた将棋が気付かせてくれるということでしょう。

それを米長さんは「盤が微笑む」と表現されたのです。

自分のダメな部分や間違えた部分からは目を背けたくなくなります。でもそこで逃げずに負けた原因と向き合い、自分自身の成長に活かせることに幸せを感じていく。それが「勝負師の負け方」だということです。

その裏には「もっと強くなりたい」という、強い思いがあるからだと思いました。だから、たとえ負けが込んでも、また厳しい勝負に臨めるのです。

このお話で、私の中での「勝ち・負け」の定義が変わりました。

実は先日、仕事で大きな失敗をしたのです。時間をかけて精一杯取り組んだことが帳消しになり、その失敗を突きつけられた時にはとても落ち込みました。

その時に、米長さんの言葉を思い出しました。「**大事なのは勝負の結果だけではない。その結果から学ばない今の私の状態が「負け」なのだ**」と思いました。

仕事の振り返りをして何を学べたか、どこを改善するかを記録し、「次回はもっと良くするぞ」とワクワクする状態になることが、私にとっての仕事のゴールになりました。

「勝ち負けに一喜一憂するのではなく、その勝負から何を学んだかが大切なのだ」

そう思えるようになってからは、失敗で落ち込んだ心が少しずつ復活するようになりました。

今回の心の栄養剤は、この春就職や転職をされて頑張っておられる方をイメージしつつセレクトしました。

私自身、くすりのキュートを開業して36年間、落ち込む場面は幾度もありましたが、「同じ失敗をしないようにしよう！」と思うのに精一杯で、その失敗をバネにしたという思いはなく、『継続は力』⇒『継続だけが力』が大切だと理解していても、なかなか続けられないことばかりで情けないのですが、このキュートのDM⇒「いたわり」妻担当、「心の栄養剤」私担当だけは今回でNo225回続けています。

結果～「心の栄養剤」を書き続けている事で、私自身、多少なりとも成長できたという実感があります。

PS：最近よくお客様から「読んでますよ～感動しました」などと声をかけて頂きありがたいです。頑張りま～す！！

くすりのキュート 倉光 浩城

※ご相談がございましたら、いつでもお電話くださいませ😊

TEL (090-8357-2904)

